教育研究業績書

2025年05月07日

所属： 看護学科　　資格： 講師　　氏名： 種村　智香

研究分野	研究内容のキーワード
臨床看護，慢性期看護	自己免疫性水疱症（天疱瘡・類天疱瘡），Quality of Life，慢性創傷，慢性疼痛
学位	最終学歴
博士（看護学）	武庫川女子大学大学院看護学研究科博士後期課程修了

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
1.紙面事例と実演、実際の患者の語りを用いた遠隔実習	2020年5月～2020年7月	新型コロナウイルス感染拡大の影響にて、病院での臨地実習が困難な状況となった。そのため、Google ClassroomおよびMeetを用いて遠隔での実習を行った。事例の模擬カルテを作成し、学生がカルテからの情報収集を想定して、パソコン画面から情報を収集を行う方法を実施した。また、実際に患者に関わることができないため、教員が患者役を行い、学生に対してコミュニケーションを図りニーズの表出等を行った。さらに、実際の患者の語りを聴くことも重要と考え、Depex Japanに依頼し、乳がんおよびクローン病患者の語りを学修資材として視聴した。遠隔実習においても、実習目標を達成するための可能な教育実践に努めた。
2.成人看護学実習（慢性期）での臨床指導者との看護計画の方向性の確認	2019年9月30日～現在	武庫川女子大学看護学部成人看護学（慢性期）の助教として、学生が看護計画を立案する際に、可能な範囲で実習1週目の金曜日に臨床指導者に助言を得て、看護計画の方向性の確認を行っている。実習2週目に立案した看護計画についてカンファレンスを実施するが、その際に学生が立案した看護計画と、臨床現場での看護の方向性に大きなずれが生じにくくなっている。
3.成人看護学実習（慢性期）の実習記録を用いた看護展開の指導	2019年9月30日～現在	武庫川女子大学看護学部成人看護学（慢性期）の助教として、学生が受け持ちをしていた患者2名において、自分自身も実習記録を用いて看護展開を実践した。実際に使用している実習記録を記載することで、学生が記録上で抱える困難感や、今後の実習記録の改善案などについても気づくことができた。記録にそって指導し、看護展開が理解・実践できるように、現在も実習記録の改善等を検討している段階である。
4.成人看護学Ⅱ（慢性期）での演習補助	2019年4月～現在	武庫川女子大学看護学部成人看護学（慢性期）の助教として、自身の臨臨床経験を活かし、血糖測定・インスリン施注、点滴、心電図、呼吸音聴取等、技術演習での補助を行っている。
5.院内のプリセプター、コーチ研修の講義担当	2016年4月～2019年3月	大阪市立大学医学部附属病院の看護部教育委員として、院内のプリセプター研修、コーチ研修の講義資料作成および講義担当を行った。スライドを用いた講義およびグループワーク、個人ワークを取り入れた。受講生からは、「理解できた、満足できる研修であった」等の反応を得ることができた。
6.院内研修のインストラクター	2016年4月～2019年3月	大阪市立大学医学部附属病院の看護部教育委員として、新人看護師研修（採血・静脈注射・12誘導心電図・救急看護）のインストラクターを務め、実技指導を行った。教科書だけでは学ぶことができない経験知から伝えられる技術（コツ）についても伝え、研修生からは「実践してみようと思った」等の反応を得ることができた。
7.2年目看護師の指導担当	2016年4月～2019年3月	大阪市立大学医学部附属病院の看護主任として、所属病棟の卒後2年目看護師の指導担当を行った。看護技術の未経験項目の把握と調整、アセスメント能力および看護実践能力向上のために、2か月に1度面談を行い、

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
		その時期に応じた課題を提示し指導に関わった。また、経験の概念化シートを用いて、看護実践を理論化するワークを実践した。
8.臨地実習全期間中の指導担当	2016年4月～2019年3月	大阪市立大学医学部看護学科臨地実習講師（称号付与）および大阪市立大学医学部附属病院看護主任として、基礎看護学の実習生10名、早期体験実習の実習生6名を担当した。臨地実習指導者として、白鳳短期大学基礎看護学実習Ⅱの実習生4名を担当した。実習期間中は、毎日指導に関わることができるよう、病棟師長の調整のもと常に日勤勤務を行った。毎日の学生カンファレンスに参加し、患者の現状や実習に対する反応を積極的に学生に伝えるようにした。また、学生が、臨床現場での学びを看護展開に生かし、座学とのつながりを考えられるように、実習記録の確認を行い、フィードバックを行った。学生からは、「演習や座学だけでは学ぶことができない有意義な学びができた、臨床をするために技術演習や座学をもっと頑張ろうと思えた」等の反応を得ることができた。
9.臨地実習の受け入れ準備・調整	2016年4月～2019年3月	大阪市立大学医学部看護学科臨地実習講師（称号付与）および大阪市立大学医学部附属病院看護主任として、実習分野、期間、人数、実習目的、実習スケジュール等を記載したオリジナルのポスターを作成し、病棟スタッフに対して周知活動を行った。また、学生が効果的に実習に取り組めるよう、病棟師長と熟考し患者選定を行い、事前に実習の日程や概要等を患者に説明し、体調不良時は断ることができること等の倫理的配慮にも努めた。大学との実習説明会には、病棟師長と共に必ず出席し、状況把握に努めた。病棟スタッフ、患者の実習に対する受け入れは良好であり、実習中のトラブル等はなかった。
10.がん看護専門分野（指導者）講義研修　修了後の院内学習会開催	2014年8月	国立がん研究センターにて開催された、がん放射線療法看護コース指導者講義研修修了後、院内の放射線治療に関連する病棟を対象として放射線治療の基礎知識、看護ケア（皮膚ケアと口腔ケア）に関する学習会を行った。学習会終了後に学習会の内容が理解できたか、実践に役立つ内容であったかについてアンケート調査を行い、学習会終了３ヶ月後に再度、学習会の内容が実践に役立っているかどうかのアンケート調査を行い、その結果を国立がん研究センターに提出した。
2 作成した教科書、教材		
1.院内クリニカルラダー評価表	2018年3月	大阪市立大学医学部附属病院の看護部教育委員として、自施設のクリニカルラダーに日本看護協会版クリニカルラダーを導入し改定を行った。 本人担当部分：ラダーⅠ（改定版ラダーⅡ）
2.大阪市立大学医学部看護学科の実習指導教材「実習虎の巻」改訂	2018年3月	2015年度の副主任実習グループが作成した、大阪市立大学医学部看護学科に対する実習指導教材「実習虎の巻」の改定を2017年度の副主任実習グループメンバーと共に行った。臨地実習担当者（副主任）のみならず他のスタッフも同様に実習指導が行えるように、1日ごとの実習指導案を明確にする等の修正を行った。「その日に指導すべきことが明確になった、わかりやすくなった」等の反応が得られた。
3.Support Team Assessment Schedule 日本語版（STAS-J）導入のための院内学習会資料	2016年3月	大阪市立大学医学部附属病院のがん看護リンクナースとして、2014年度より院内に導入された、がん患者の苦痛スクリーニングツールであるSTAS-Jを浸透させるために、他病棟のリンクナース他3名と協同して院内学習会資料を作成した。
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1.コーチ（プリセプター指導担当）の経験	2015年4月～2016年3月	大阪市立大学医学部附属病院の看護師としてコーチを1年間務め、3名のプリセプターの指導を担当した。ま

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
		た、3名のプリセプティ（新人看護師）の症例研究発表の指導に携わった。
2.プリセプター（新人指導担当）の経験	2005年4月～2007年3月, 2008年4月～2009年3月	大阪市立大学医学部附属病院の看護師としてプリセプターを3年間務め、3名の新人看護師の育成に携わった。
3.臨地実習指導者の経験	2003年4月～2019年3月	大阪市立大学医学部附属病院の看護師として、2003年度より基礎看護学実習生、成人看護学（慢性期）実習生の日々の実習指導担当を行った。2016年度より大阪市立大学医学部看護学科の臨地実習講師として、基礎看護学の実習生10名、早期体験実習の実習生6名を担当した。臨地実習指導者として、白鳳短期大学基礎看護実習Ⅱの実習生4名を担当した。その他、四天王寺大学保健教育コース養護教諭の臨地実習、医学部早期体験実習、ナーシングインターンシップ、大阪府主催の1日看護師体験の受け入れを病棟スタッフと共に行った。
4 その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1.3学会合同呼吸療法認定士 2.看護師免許	2007年1月 2003年3月	2011年12月まで
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1.キャリア委員としての活動	2023年4月～現在	武庫川女子大学看護学部のキャリア委員として、学部生の就職支援（実習病院就職説明会、キャリアガイダンス、小論文対策講座の開催等）、卒業生の支援（ホームカミングデー、キャリアサポート等）に携わった。
2.親睦会委員としての活動	2021年4月～2022年4月	武庫川女子大学看護学部の親睦会委員として、おもに学部内の歓送迎会、忘年会等の企画・運営に携わった。
3.まちの保健室プロジェクトメンバー	2020年4月～現在	武庫川女子大学看護学部のまちの保健室プロジェクトメンバーの渉外・広報・庶務を担当している。おもに広報を担当しており、ホームページ、ちらし、ポスター等での開催告知を行っている。
4.広報・入試委員としての活動	2020年4月～2023年3月	武庫川女子大学看護学部の広報・入試委員として、大学の広報活動・入試業務に携わった。おもに、オープンキャンパス、看護学部のBlog更新、学科パンフレット・キャンパスガイドの作製を担当した。
5.学生委員そしての活動	2019年4月～現在	武庫川女子大学看護学部の学生委員として、学生の大学生活における支援業務に携わった。おもに学生幹事懇談会、卒業証書授与会の準備・運営に携わっている。
6.看護主任の経験	2016年4月～2019年3月	大阪市立大学医学部附属病院の看護主任として、病棟管理業務に携わった。また、病棟のクリニカルパス委員を中心として、皮膚悪性腫瘍（全身麻酔、局所麻酔）、水疱症、エキスパンダー挿入術、乳房再建術、蜂窩織炎、乾癬レミケード治療等のクリニカルパスの改定、承認に携わった。
7.がん看護リスクナースの経験	2014年4月～2016年3月	大阪市立大学医学部附属病院勤務時、院内のがん看護分野の専門看護師および認定看護師が開催しているがん看護研修を全課程修了し、2年間がん看護リンクナースとして活動した。また、他部署のがん看護リンクナースと協同し、がん患者の苦痛スクリーニングツールであるSTAS-Jが院内に浸透するよう努めた。
8.病棟内固定チームナーシングにおけるチームリーダー、サブリーダーの経験	2007年4月～2013年3月	大阪市立大学医学部附属病院勤務時、所属病棟において、チームリーダー、サブリーダーを各3年間務め、

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
9.内科、外科病棟での臨床経験	2003年4月～2019年3月	チーム運営に携わった。 2003年4月より、大阪市立大学医学部附属病院の常勤看護師として、呼吸器内科、老年神経内科、形成外科、小児形成外科、皮膚科、整形外科、女性診療科での臨床を経験した。
4 その他		
1.厚生労働省　慢性疼痛診療体制構築モデル事業　大阪大学　慢性疼痛診療研修会修了	2019年2月	厚生労働省の主催する慢性疼痛診療体制構築モデル事業、慢性疼痛診療研修を修了した。
2.厚生労働省　認知症対応力向上研修修了	2018年10月	厚生労働省が定める病院勤務の医療従事者向け認知症対応能力向上研修を修了した。（2018年12月26日に大阪市長より修了証書交付）
3.がん看護専門分野（指導者）講義研修　がん放射線療法看護コース修了	2014年7月	国立がん研究センター、がん対策情報センター主催のがん放射線療法看護コースを3日間受講した。
4.大阪府緩和ケア研修修了	2014年2月	大阪市立大学医学部附属病院にて開催された大阪府緩和ケア研修を2日間受講した。
5.エンド・オブ・ライフケア研修修了	2013年12月	日本看護協会主催の第1回エンド・オブ・ライフケア研修を受講した。
6.がんプロフェッショナル養成セミナー修了	2012年12月	有馬で開催されたがんプロフェッショナル養成セミナーを2日間受講した。
7.がん看護3研修修了	2012年8月	日本看護協会主催のがん看護3研修を受講した。
8.日本緩和医療学会緩和入門セミナー修了	2012年6月	日本緩和医療学会主催の緩和入門セミナーを受講した。
9.呼吸療法認定士講習修了	2006年8月	3学会（日本胸部外科学会、日本呼吸器学会、日本麻酔科学会）主催の第11回呼吸療法認定士講習を2日間受講した。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
2 学位論文				
1.天疱瘡・類天疱瘡患者の日常生活における困難感尺度開発の試み	単	2024年3月	武庫川女子大学大学院看護学研究科看護学専攻博士後期課程，博士論文	天疱瘡・類天疱瘡患者のQOLを向上するために、①天疱瘡・類天疱瘡患者の日常生活における困難感の様相を明らかにし、②天疱瘡・類天疱瘡の患者の日常生活における困難感を目に見える形で測定し、看護支援に展開するための尺度を開発することを目的とした。第1研究では、13名の天疱瘡・類天疱瘡患者にインタビュー調査を行った。第2研究では、第1研究により明らかとなった困難感の様相と具体的状況をもとに尺度項目を作成し、患者会に所属する患者による予備調査を経て、皮膚科外来に通院中の患者に本調査を実施し、日常生活における困難感尺度[暫定版]を作成した。開発した尺度は、一定の妥当性・信頼性は検証されたが、臨床での実用にあたっては課題が残されており、今後、尺度に修正を加え、活用方法を検討する必要がある。
2.慢性創傷患者の疼痛評価－創傷処置時の疼痛に焦点を当てて－	単	2017年3月	武庫川女子大学大学院看護学研究科看護学研究コース修士課程，修士論文	慢性創傷患者15名を対象として、①日本語版Short-Form McGill Pain Questionnaire-2を用いた疼痛の質的評価、②創傷処置時の疼痛の強さの評価、③創傷処置時の疼痛要因を検討した。結果、慢性創傷患者は、平常時より持続的な性質が強い複雑な疼痛を抱えており、このような慢性創傷患者の80％は創傷処置により疼痛が増強していた。処置前の適切なタイミングで薬理的介入を行い、「傷を擦る、悪い組織をとる」「ガーゼの固着」「創部の洗浄」「創周囲のテープの剥離」の要因に対して、病態や個別性に応じた処置方法を検討することで、創傷処置時の疼痛を緩和することができると考えられた。
3 学術論文				
1.Development of Japanese versions of the Autoimmune Bullous Disease Quality of Life	共	2025年3月20日	The Journal of Dermatology	This study evaluated the validity and reliability of the Japanese versions of the Autoimmune Bullous Disease Quality of Life (ABQOL) and Treatment of Autoimmune Bullous Disease Quality of Life (TABQOL) questionnaires, as well as their practical application in clinical settings.

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
and Treatment of Autoimmune Bullous Disease Quality of Life questionnaires				The Japanese versions of the ABQOL and TABQOL are expected to be implemented in clinical practice as reliable and validated tools in Japan. Chika Tanemura, Maya Nunotani, Kyoko Kawabata, Yuki Morooka, Jun Yamagami, Risa Kakuta, Yasuko Saito, Yuichi Kurihara, Hayato Takahashi, Norito Ishii, Hiroshi Koga, Takekuni Nakama, Daisuke Hayashi, Sho Hiroyasu, Chiharu Tateishi, Daisuke Tsuruta, Dedee F. Murrell, Takashi Hashimoto
2.天疱瘡・類天疱瘡患者の生活体験を踏まえたケアー入院中および退院後の視点から―（特集記事）	単	2023年7月	日本難病看護学会誌28（1）p.6-10	天疱瘡・類天疱瘡患者は、入院中のみならず、退院後の生活においても、全身および局所の症状や治療、治療による副作用の管理を長期的に継続する必要があるため、生活者の視点から、その体験を理解しケアにあたることが重要である。そこで、筆者の臨床経験と研究を通して得られた天疱瘡・類天疱瘡患者へのケアについて、①移動・食事・清潔・更衣・整容・排泄などの日常生活、②患部の処置、③治療の副作用、再燃の早期発見・予防、④心理・社会面の側面から患者の生活体験をもとにその知見を述べた。 未だこの疾患の患者への理解やケアは十分ではない現状があり、今後、天疱瘡・類天疱瘡患者への看護師への理解を深め、ケアを確立していく必要があると考えられた。
3.天疱瘡・類天疱瘡患者の日常生活における困難感（査読付）	共	2022年12月	日本看護科学会誌 42 巻 p.365-374	天疱瘡・類天疱瘡患者が発症初期から現在に至るまでに体験した日常生活における困難感を明らかにすることを目的として、13名の患者を対象に半構造化インタビューを行い、質的記述的に分析した。 身体症状の強い時期は、【症状により日常生活行動に支障を来す】【患部の必要な処置に伴い痛みや負担を感じる】が、治療によりこれらの大部分は軽快し、【ステロイド療法の副作用により日常生活行動に制約がある】といった治療により軽快しない困難感を生じていた。また、【希少疾患であること，他者に理解されないことで不安，孤独を感じる】【病気や治療，再燃に対する不安，恐れを感じる】【症状や治療の副作用による影響で人付き合いが難しい】【病気により学業，就職，仕事が思うようにいかない】心理的・社会的な困難を感じていた。 共同著者：種村智香、布谷麻耶、師岡友紀、川端京子、鶴田大輔、橋本隆
4.下肢慢性創傷患者における疼痛評価―日本語版Short-Form McGill Pain Questionnaire-2およびVisual Analogue Scaleを用いて―(査読付)	共	2019年12月	日本フットケア学会雑誌　17(4) p.186-191	慢性創傷の疼痛は、急性創傷の疼痛とは異なり、侵害受容性疼痛のみならず、神経障害性疼痛、非器質的疼痛にも起因した痛覚過敏やアロディニアを生じる複雑な疼痛であると報告されている。そのため、従来より多用されているVisual Analogue Scale(VAS)に加え、日本語版Short-Form McGill Pain Questionnaire-2(SF-MPQ-2)を用いて、疼痛の性質や特徴を評価することを目的に、A大学病院の形成外科、皮膚科の混合病棟に入院中の下肢に慢性創傷をもつ患者7名を対象として調査を行った。VASを用いた評価では、1名のみが中等度以上の強さの痛みを認めた。一方、SF-MPQ-2を用いた評価では、対象者の半数以上で持続的・間欠的・神経障害性・感情的表現の4領域すべての性質の痛みを認め、約40%は神経障害性疼痛の可能性があった。また、70%以上で痛覚過敏、アロディニアに関連した痛み表現を認め、SF-MPQ-2総合得点が高い者は、神経障害性疼痛の可能性があり、感情的表現の性質と痛覚過敏、アロディニアに関連した痛み表現が強く認められた。 共同著者：種村智香、布谷麻耶、宮本摂、川端京子
5.慢性創傷患者の創傷処置時の疼痛緩和を目指して－痛みを我慢している患者に焦点を当てて－（査読付）	共	2018年4月	第48回日本看護学会論文集　慢性期看護　p.27-30	処置時に痛みを我慢している慢性創傷患者11名を対象として、創傷処置の内容や疼痛の程度、疼痛への影響要因や鎮痛剤の使用状況について調査した。結果、疼痛要因は「傷を擦る、悪い組織をとる」「ガーゼの固着」「創部の洗浄」「創周囲のテープの剥離」と回答した割合が高く、これらは鎮痛剤使用者においても同様の結果であった。創傷処置時の疼痛状況としては、処置直後では54.5％で中等度（30mm）以上のVASを認めたが、処置前の鎮痛剤使用率は36.4％と低かった。よって、これらの疼痛要因を再認識し、慢性創傷の疼痛に特徴的な痛覚過敏やアロディニアに配慮して処置の介入を行うこと、痛みの原因を明らかにした上で処置前の適切なタイミングで

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
				薬理的介入を行うことで、創傷処置時の疼痛緩和に繋がると考えられた。 共同著者：種村智香、川端京子、布谷麻耶、宮本摂
その他				
１．学会ゲストスピーカー				
２．学会発表				
1.天疱瘡・類天疱瘡患者のQuality of Lifeの向上を目指して一疾患特異的尺度の開発一	共	2025年1月25日	第46回水疱症研究会（於久留米）	天疱瘡・類天疱瘡を代表とする自己免疫性水疱症は、全身の皮膚や粘膜に水疱・びらん等を生じる希少難治性疾患であり、皮膚・粘膜病変に伴う痛み、そう痒感、瘢痕形成などの身体症状や、日常生活への影響、再燃の不安・治療の副作用などにより、QOLに多面的な影響を受ける。本研究では、2013年にオーストラリアで開発された自己免疫性水疱症疾患特異的尺度であるAutoimmune Bullous Disease Quality of Life（ABQOL）とTreatment Autoimmune Bullous Disease Quality of Life（TABQOL）の日本語版の妥当性・信頼性を検証し、さらに臨床現場での活用を目指して、本尺度の実用性を検討した。分析の結果、本尺度は一定の妥当性・信頼性が検証され、今後、我が国での使用が可能になると考える。 共同発表者：種村智香、布谷麻耶、師岡友紀、川端京子、石井文人、古賀浩嗣、名嘉眞武國、林大輔、廣保翔、立石千晴、鶴田大輔、山上淳、角田梨沙、齋藤泰子、栗原佑一、高橋勇人、橋本隆
2.天疱瘡・類天疱瘡患者が病いに伴い感じる困難ーアンケートの自由記述の内容分析ー	共	2024年8月25日	第29回 日本難病看護学会学術集会（於静岡県コンベンションアーツセンター）	天疱瘡・類天疱瘡が、病いに伴い感じる困難について、アンケートの自由記述の内容を分析し、明らかにした。結果、患者が感じる最初で最大の困難は、【初期症状の発見・診断の遅れ】であった。これにより、のちに生じる【皮膚・粘膜病変に伴うびらん・出血・痛み・かゆみ等の苦痛】【口腔粘膜病変に伴う摂食障害】【患部の処置に伴う苦痛・負担】【皮膚症状や治療の副作用等に伴う外観の変化】といった困難を増強させていた。 共同発表者：種村智香、布谷麻耶
3.天疱瘡・類天疱瘡患者の生活体験の実態ー日常生活における困難感と対処の視点からー		2022年1月22日	第43回水疱症研究会（於高知）	天疱瘡・類天疱瘡の患者13名を対象として、半構造化面接法にて日常生活における困難感と対処について調査し、質的記述的に分析した。 日常生活における困難感としては、【症状により日常生活行動に支障を来す】【ステロイド療法の副作用により日常生活行動に制約がある】【患部の必要な処置に伴う痛み、負担がある】【希少疾患であること、他者に理解されないことにより不安、孤独を感じる】【病気や治療、再燃に対する不安、恐れを感じる】【症状や治療の副作用による影響で人付き合いが難しい】【病気により学業、就職、仕事が思うようにいかない】といった計7カテゴリと27サブカテゴリが生成された。困難感への対処としては、【症状の出現、悪化を予防するために皮膚、粘膜への刺激を避ける工夫をする】【自分に合うものや方法を探し、試して見出す】【皮膚症状が他者に見えないように隠す】【周囲の理解を得るために病気のことを話す】【病気とうまく付き合うために生活を調整する】【不安、孤独を軽減するために同じ病気の人と交流する】【安心感を得るために病気や治療について情報を得る】の計７カテゴリと30サブカテゴリが生成された。 天疱瘡、類天疱瘡患者は、日常生活において、症状や治療に伴い身体的、心理的、社会的なさまざまな困難感を抱え、対処をしていた。困難感と対処の視点から生活体験の実態を知ることで、今後必要となる支援や、疾患の特徴を踏まえた上で既存のケアを活用して支援方法を確立できる可能性が示唆された。 共同発表者：種村智香、川端京子、布谷麻耶、師岡友紀、鶴田大輔、橋本隆
4.天疱瘡・類天疱瘡患者の日常生活における困りごと ー患者会会報誌の記述内容か	単	2021年11月	第9回日本難病医療ネットワーク学会学術集会（オンライン開催）	天疱瘡・類天疱瘡患者、疾患による症状や治療により、身体面のみならず心理社会面においても、生活の質に深刻な影響を受けている。そこで、2011年6月～2019年9月までの「天疱瘡・類天疱瘡友の会」の会報誌の記述内容から、患者の日常生活における困りごとの

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
ら－				内容を抽出し、質的記述的に分析した。 日常生活における困りごとは、【症状に伴う困難】【治療・副作用による苦痛】【心理・社会面での困難】に３つのカテゴリに分類された。【症状に伴う困難】では、〈びらん、痛みにより食事に支障を来す〉〈痛みにより歯磨きが難しい〉〈痛みにより着替え・シャンプーがつらい〉〈びらんによりお化粧ができない〉〈痛みにより活動が妨げられる〉〈何気ない刺激で症状が悪化する〉、【治療・副作用による苦痛】では、〈ステロイド治療に伴う苦痛がある〉〈病変の処置に苦痛を伴う〉、【心理・社会面での困難】では、〈先の見えない不安がある〉〈相談できる人がいない〉〈就職、仕事での苦痛がある〉〈偏見をもたれる〉といったサブカテゴリが抽出された。 発表者：種村智香
5.肺癌患者のCINVの発現状況と食事摂取状況について－後ろ向き観察研究法を用いて－	共	2019年10月	第57回日本癌治療学会学術集会（於福岡国際会議場・福岡サンパレス・マリンメッセ福岡）	シスプラチン（以下CDDP）またはカルボプラチン（以下CBDCA）併用化学療法を受ける肺癌患者に起因する悪心・嘔吐（以下CINV）の発現状況と食事摂取状況を後方視的観察法にて調査した。結果、両群遅発期CINVあり群に比べて、遅発期CINVなし群は、常食以外の病院食を早期から選択し、摂取しようとしていた。CINVだけではなく、継続的に食事摂取状況も観察が必要であることが示唆された。 共同発表者：川端京子、樽井亜紀子、布谷麻耶、南裕美、種村智香、光岡茂樹
6.皮膚悪性腫瘍患者における早期からの緩和ケア－患者アンケートを用いたアドバンスケアプランニングの実際－	共	2018年6月	第23回日本緩和医療学会学術大会（於神戸ポートピアホテル）	皮膚悪性腫瘍患者の治療において、従来の抗がん剤治療に比べて比較的治療による副作用が少ない免疫チェックポイント阻害薬が用いられることが多く、全身状態が悪化した状態でも治療の継続が可能なため、看取りの看護に遅れが生じている現状があった。そこで、アドバンスケアプランニングの導入が必要であると考え、患者アンケートを用いて、患者の希望にそった看取りの看護を2名の患者に実践した。結果、患者アンケートを用いることは、医療者が普段質問しづらい内容を意図的に情報収集しやすく、患者の不安や人柄、大切にしたいこと等、思いを知るツールとして有用であった。これらの結果をもとに、その人らしさを尊重した退院支援に繋げることができた。 共同発表者：石黒圭、種村智香、宮本摂
7.1泊2日乾癬レミケード治療パス導入における患者満足度の変化	共	2017年12月	第18回日本クリニカルパス学会学術集会（於大阪国際会議場）	平成29年2月より2泊3日の乾癬レミケード治療パスをDPCⅡ期以内の1泊2日に変更した。これにより、患者に負担が生じているのではないかと考え、1泊2日と2泊3日の両方の治療スケジュールを経験した患者9名のうち同意を得た6名を対象にアンケート調査を実施した。結果、半数の患者が治療開始までの待ち時間に不満足、やや不満足と回答し、治療や症状に関して医師と話す時間が減ったと回答した。よって、入院から治療開始までのスケジュールがスムーズに行えるための調整と、医師と話す時間を意識的に確保していくことで患者満足度の向上へと繋げることができると考えられた。 共同発表者：田中真帆、中川悠海、種村智香、阿曽桂子、濵野由季代、三浦あずさ、宮本摂
8.慢性創傷患者における創傷処置時の疼痛緩和を目指して－痛みを我慢している患者に焦点を当てて－	共	2017年9月	第48回日本看護協会－慢性期看護－学術集会（於神戸ポートピアホテル）	慢性創傷患者の創傷処置時の痛みを緩和するための方法を見出すために、創傷処置時の疼痛要因、疼痛状況、処置内容、鎮痛剤の使用状況を調査した。結果、対象者73.3％が処置時に痛みを我慢していたが、処置前の鎮痛剤使用率は36.4％と低い現状が明らかとなった。疼痛要因では、「傷を擦る、悪い組織をとる」「ガーゼの固着」「創部の洗浄」「創周囲のテープの剥離」が挙げられた。これらの疼痛要因に配慮し、処置前の適切なタイミングで薬理的介入を行うことが処置時の疼痛緩和に繋がると考えられた。 共同発表者：種村智香、宮本摂、布谷麻耶、川端京子
9.慢性創傷患者における疼痛の質的評価－日本語版Short-Form McGill Pain Questionnaire-2を用いて－	共	2017年3月	第15回日本フットケア学会年次学術集会（於岡山コンベンションセンター・ANAクラウンプラザホテル岡	慢性創傷患者15名を対象に、日本語版Short-Form McGill Pain Questionnaire-2（SF-MPQ-2）を用いて疼痛の質的評価を行った。結果、本研究の慢性創傷患者は、平常時より持続的な痛みの性質が強く、痛みの強い対象者では、痛覚過敏やアロディニアの徴候が示唆された。 共同発表者：種村智香、宮本摂、布谷麻耶、川端京子

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
10.STAS-Jを導入したことによる看護師の意識調査	共	2016年6月	山・岡山県医師会館） 第21回日本緩和ケア医療学会学術大会（於国立京都国際会館・グランドプリンスホテル京都）	4病棟87名の看護師を対象に、STAS-J導入による利点や問題点に関するアンケート調査を行った（回収率87.4%）。結果、STAS-Jを導入することで、患者の全体像の把握や問題点の明確化に役立っていたが、看護記録や看護展開に繋がっていない等の問題点が挙げられた。そこで、看護記録の方法やSTAS-J再評価のタイミング等を明示した「STAS-J導入のフロー図」作成等、院内でのSTAS-J定着を目指した活動を行った。 共同発表者：樽井亜紀子、林恵津子、大窪恵子、種村智香、鶴田理恵
３．総説				
1.自己免疫性水疱症患者のQuality of Lifeに影響を及ぼす要因の検討：文献レビュー（査読付）	共	2024年4月	武庫川女子大学看護学ジャーナル	天疱瘡・類天疱瘡を代表とする自己免疫性水疱症患者のQuality of Life(以下QOL）に影響を及ぼす要因を明らかにするために、文献調査を行った。医中誌webおよびPubMed、CINAHLでの検索の結果、計189文献が抽出され、最終的に52文献を分析対象とした。QOLに影響を及ぼす要因には、年齢・性別・併存疾患などの患者背景、病型、病変の部位・範囲、疾患の重症度・活動性、罹病期間、疾患経過、疼痛・そう痒感などの身体症状、治療状況、メンタルヘルス、仕事などがあった。これらの要因を支援方略の介入変数として捉え、要因の背景にある個々の患者の状況や、要因同士の関連性を踏まえてアセスメントすることで、患者のQOLを向上・維持する支援に繋がると考える。 共同著者：種村智香、布谷麻耶、師岡友紀、川端京子、橋本隆
４．芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
５．報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
1.武庫川女子大学看護学部「まちの保健室」2024年度事業報告	共	2025年3月	武庫川女子大学看護学ジャーナル，10巻	2024年度の「まちの保健室」活動実績について報告した。 作成者：和泉京子、枝澤真紀、金井貴子、金谷志子、宝田穂、種村智香、寺岡春菜、徳重あつ子、西山、野寄亜矢子、早川りか、深山華織、間城絵里奈、松井菜摘、宮武彩美
2.武庫川女子大学看護学部「まちの保健室」2023年度事業報告	共	2024年3月	武庫川女子大学看護学ジャーナル，9巻，pp.1-3	2023年度の「まちの保健室」活動実績について報告した。 作成者：和泉京子、枝澤真紀、金谷志子、工藤大祐、清水佐知子、宝田穂、種村智香、徳重あつ子、野寄亜矢子、早川りか、黄智瑛、桧山美恵子、福井美苗、松井菜摘、森下和恵
3.武庫川女子大学看護学部「まちの保健室」2022年度事業報告	共	2023年3月	武庫川女子大学看護学ジャーナル，8巻，pp.1-4	2022年度の「まちの保健室」活動実績について報告した。 作成者：和泉京子、枝澤真紀、金谷志子、工藤大祐、清水佐知子、宝田穂、種村智香、徳重あつ子、桧山美恵子、福井美苗、松井菜摘、南口陽子、森下和恵、師岡友紀
4.武庫川女子大学看護学部「まちの保健室」2021年度事業報告	共	2022年1月	武庫川女子大学看護学ジャーナル，7巻，pp.3-5	2021年度の「まちの保健室」活動実績について報告した。 作成者：和泉京子、枝澤真紀、金谷志子、久山かおる、清水佐知子、宝田穂、谷澤陽子、種村智香、徳重あつ子、桧山美恵子、福井美苗、松井菜摘、南口陽子、師岡友紀
６．研究費の取得状況				
1.日本学術振興会科学研究費（若手研究）	単	2025年4月～2028年3月	日本学術振興会	アクションリサーチ法を用いた天疱瘡・類天疱瘡患者のUnmet Needs支援システムの確立 研究代表者：種村智香
2.日本学術振興会科学研究費（基盤研究C）	共	2024年4月～分担	日本学術振興会	診断後間もない成人期クローン病患者へのセルフケア支援アプリの開発と検証 研究代表者：山本孝治
3.日本学術振興会科学研究費（若手研究）	単	2020年4月～2024年3月	日本学術振興会	患者の視点を基盤とした天疱瘡・類天疱瘡患者における日常生活支援モデルの構築 研究代表者：種村智香

学会及び社会における活動等	
年月日	事項
1.2024年5月～現在	日本皮膚科学会会員
2.2023年10月～現在	日本難病看護学会会員
3.2021年11月～現在	日本慢性看護学会会員

学会及び社会における活動等	
年月日	事項
６．研究費の取得状況	
4.2021年8月～現在	日本難病医療ネットワーク学会会員
5.2021年8月～現在	日本看護科学学会会員
6.2021年～2022年	西宮市保健所支援活動
7.2020年4月1日～現在	武庫川女子大学まちの保健室プロジェクトメンバー　渉外・広報・庶務担当
8.2020年～2022年	武庫川学院鳴松会常任幹事
9.2019年12月～現在	天疱瘡・類天疱瘡友の会会員
10.2019年10月13日	関西地区第一回「天疱瘡・類天疱瘡友の会」ボランティアスタッフ
11.2019年9月23日	武庫川女子大学看護フェスタ：まちの保健室（健康相談）・あそびのひろば担当
12.2019年9月～2022年3月	日本フットケア・足病医学会会員
13.2016年10月～2019年12月	日本フットケア学会会員